

哲学者詩人ギーさんとの交流から考える

島崎 隆

一 ギーさんのメッセーじ

二〇〇九年一月八日、詩人でもあり、東京唯物論研究会の運営委員でもある長野芳明さんのお誘いで、私たちは、フランス人のギー・クレキーさん (Guy Crequie 一九四三年生まれ) と知的かつ文化的な交流をする機会を得た。それは「仏哲学者ギーさんと東西の哲学と現代を語る会」と題されたもので、そこでは、まず氏が「日本の哲学者にお会いするときに」というメッセーじを読み上げ、「平和省」という自作の詩を朗読した。さらに、おもに東京唯研の関係で、吉田傑俊さん、福山隆夫さん、それから私が、あらかじめ配布されていたギーさんの「メッセーじ」にたいして簡単にコメントと質問をし、それについて、全体的にギーさんが応答する形式を取った。

ところで、ギーさんという方は生まれつき盲目だったが、手術によって視力を獲得し、オペラ界でもテノール歌手として活躍し、ユネスコや国連で多様に活躍されているとのことである。そして、詩人としても活発に活動されている。日本では考えられないが、哲学的な教養も豊富にもっておられ、それが氏のメッセーじにも現れている(この紹介は、日本の詩人の方たちがつくってくれたステキなパンフレットによる)。まことに、天分豊かな経歴の持ち主である。氏は来日を機会に、日本の詩人たちとの交流のほかに、あらためて日本の哲学者とも知的に交流したいということで、詩人でもある長野さんに依頼されたわけである。

さて、学会などでの学者・研究者との交流であるならば、それなりの流儀もあるが、哲学というその専門の枠をはずしての交流となると、私もどうしていいかわからない面がある。

いるあり、会の運営については関係者の方たちとおおいに話しあい、修正を重ねた。二人の通訳の方も、哲学にはまったく素人であり、本当に大変であったようだ。幸い、フランス啓蒙主義の専門家である石川光一さんが、ギーさんのメッセージをわかるように訳しなおしてくださったので、その点で大変ありがたかった。

以下、氏のメッセージの内容を簡単に要約し、私のコメントの内容を中心に紹介し、最後に自分の感想を述べたい。

ギーさんのメッセージは、三部構成になっており、それは以下のようである。

(1) 哲学および哲学者のステイタスについて

—— 職業的哲学者から市民的・知識人的文化への移行について

(2) 現代が抱える諸問題にたいする哲学的問いかけのこと

(3) 日本国に投げかけられている諸難問にたいしての、日本市民でもある哲学者のご判断について

ご覧のように、第一項目から第三項目へと、抽象的哲学の分野から現代的な多様な問題へと議論が広げられている。別に日本の哲学研究者を代表しているわけではないが、これに応えることは容易ではないと緊張する内容である。まず第一項目では、多くの哲学者の見解を引用しつつ、実はすべての人が哲学者であるということが強調され、哲学教育にも注目

される。ここでとくにギーさんが関心をもつのは、異文化の問題であるようだ。ソクラテス、カントらの道徳的立場、ヘーゲル、アングロサクソンの合理的哲学の立場と対比して、つまりそうした西洋の哲学者と対比して、それをひっくり返すような「アジアの賢者の不屈さ」や、「主体概念の放棄の考え」が述べられるのである。たしかに仏教などでは、知は「悪知」であるとして、主体の滅却が主張される場合がある。この点で、ベルクソンの流動的な生命哲学は、むしろアジアの認識に近いのではないか、とも示唆される。

第二項目では、まず二〇〇八年が世界人権宣言六〇周年であったことに注目がなされ、キリスト教的、マルクス主義的、イスラム的、さらに東洋的などの各種のヒューマニズムのありように目が向けられる。だが、とくに生命の尊重を含むヒューマニズムにたいして、現在、人種差別や、信仰も慈悲ももたない市場イデオロギーないし貨幣の力が世界に大きな影響を与えている。ヒューマニズムと関わって、こうした現代的傾向をどうとらえるか、私たちにお聞きしたいというのである。西洋では哲学の営みが連綿と続いて来たが、他方、仏教などの思想はヨーロッパの思想家に問いを発しているという。そこでは、自我と環境の二分が否定され、「空」「氣」「輪廻」などの思想が存在する。そうすると、ここで私たちが西洋と東洋の間で「哲学の第三の道」を支持することになるのだろうか、とギーさんは問うのである。

第三項目は、さらにより現実的な問題に目が向けられる。

とくに憲法九条についての問題、さらに地球温暖化、代替エネルギーなどの環境問題、世界規模での飢餓や暴力の問題、日本の隣国である中国や東アジアの問題などに触れられる。とくに環境問題などのこの分野で大きな経験をもち、アセアンで中心を占めるべき日本がこれらの問題群についてどう考えるべきか、をギーさんは問う。氏は国連ミレニアム大使なども勤めているが、さすがに地球規模での幅広い視野をもつていらっしやると実感したものである。

二 私の応答のレジュメ

以上、多くの内容をはしよりながら、その骨子を簡単に紹介した。これにたいし、吉田さんは、西洋では「学」としての哲学と「世界観」としての哲学が統一されているが、東洋思想は非合理的で折衷主義的限界をもつと指摘した。その意味で、仏教などに安易に依拠することの問題性を論理明快に指摘した。さらに氏は、憲法九条は核武装を放棄したのみならず、すべての戦争行為を放棄したのだと付け加えた。また福山さんは、日本の唯物論の伝統や、若者を中心とする経済問題や「生きづらさ」の問題に触れ、全国唯物論研究協会、東京唯研などの研究団体が資本主義の批判的検討を真正面からおこなっていることを伝えた。私の意見はこのお二人とも重なる論点多いが、以下はあらかじめ準備した私のレジュメの内容である。

- ギーさんからの大変興味深いメッセージを拝読し、お互いに知的刺激を得ることができました。以下の二点を相互に了解することがまず必要と感じましたので、手短かに問題提起させていただきます。なお私は哲学研究者として、ドイツのヘーゲル哲学などを研究してきました。
- 第一は、ヨーロッパのフランスと東アジアの日本の間にある「哲学格差」の問題です。哲学の専門家ではない方が、これだけ幅広く哲学について展開できるということは、日本ではほとんどまったくありえないということです。日本における哲学の位置づけの低さの問題について深刻に考えることがまずは必要と考えます。

- 日本では西洋の哲学は、明治維新の開国以来の輸入学問ですから、市民社会に生きる市民たちのものにはほとんどまったく関係がないということがあります。近代でいえば、フランスでは、ルソーにせよ、デイドロにせよ、市民社会の形成のなかで、それとの密接な関わりで哲学が自前のものとして発生してきたということがあるわけです。
- ご周知のように、ギーさんが強調されるヒューマニズムや、世界人権宣言に示された基本的人権の思想、さらにデカルトらに発する科学的・合理的な思考法は、近代の哲学者が大きなテーマとしたものです。残念ですが、日本では、こうした精神文化は本場の欧米と比べると、いまでもあまり根づいていないというのが事実だと思います。日本では、哲学は、それを専門にやる哲学研究者

の財産にしかなくなっていないのが実情です（ここに集っている哲学者の方々は、別だと思えますけれども）。

したがって、日本では、ハーバマスでいえば、「未完の近代」として、近代市民社会の価値や理念を徹底して発展させることが、欧米にもまして一層重視されます。現在、新自由主義的政策や金融恐慌のなかで非正規労働者の待遇や人権が侵されています（周辺の正社員の人も同様です）。日本ではトヨタを初め代表的な大手企業が大量解雇をやっていますが、さすがにフランスでは、サルコジ大統領を先頭に、安易な解雇は避けようとしています。これは一種のヒューマンイズムの精神にもとづくと考えられますが、そうしたヒューマンイズムの実践は、哲学的営為とも無縁ではないと思うのです。

● 教育に関連させていうと、フランスの大学入学資格であるバカロレアでは、哲学が全員必修で3時間も試験されると聞いています。詳しくは述べられませんが、日本では哲学的教養の形成は、おもに受験勉強体制のために教育ではほとんどおこなわれません。こうした事情が理解されないと、議論が始まらないと思うのです。

● 第二は、ギーさんの強調される西洋のヒューマンイズム思想との対比で、東洋の仏教などの宗教や思想の位置づけです。

● アジアの賢者が主体概念を放棄するとか、仏教がヨーロッパ思想に刺激を与えているとか、ギーさんは述べて

おり、日本などの哲学・宗教に期待を寄せておられます。また、ギーさんは体系構築を拒否したウイトゲンシュタインも引用しましたが、実は彼は、自分の思想が非西洋の人々に向かって書かれていると明快に述べました。たしかに現代の西洋哲学も、自文化の限界を打破しようとする傾向をもっています。

● 一応市民社会の哲学が形成されている欧米で、その閉塞状況を打破しようとして、東洋などの異文化の思想・宗教に関心をもつのは理解できますが、そうではない日本などからすると、日本の思想・宗教への率直な期待は何か面はゆい気がして、正直のところ困惑します。

● ギーさんの指摘される「第三の道」を追求することにもちろん異論はないのですが、その前提として、相互の社会と文化の共通性と差異をしっかりと自覚するという作業が必要だと感じます。具体的なことはここで述べられません。その点を出発点すれば、実りある議論ができるものと期待しております。

三 交流のなかから考えたこと

さて、私を含め、最初に報告した三人へのギーさん自身のコメントもあり、フロアからの活発な意見もあったが、そのなかでとくに私の印象に残ったことは以下の二つである。

第一は、哲学分野でいうと、フランスでは、ギーさんも引用したサルトル、フーコーらが注目された段階を通りすぎて、現代フランスの哲学者は、ギーさん自身にとってもはや親しみがもてない存在となっているということである。彼らは寄せ集めの材料しかもってはず、新しい哲学のコンセプトを用意できていないとされる。つまりもう、模範となる哲学者はフランスでは存在しないのだ。興味深いことに、この点で、現代フランスの哲学界へのギーさんの評価はきわめて辛いものだった。振り返れば、日本でも、現在は、ポストモダン、ポスト構造主義などの流行も過ぎ去り、ノルウェーの哲学教師のゴルデル『ソフィーの世界』（二八〇万部売れたという）への注目も昔の話になり、哲学の領域はいわば真空の状況であり、何か注目されるものが見当たらないのが現実である。もちろん、日本自身からの新しい哲学などが出てくるはずもない。

第二に、フランスもいまや新自由主義が原因となって、哲学も心理学も不用となり、ここでは、人間を目的として扱うカントの考えは消失するという。フランスの経済的現状は非人間的で、ひどいものになりつつあるというのだ。たしかにカントは、「人格」としての人間は、手段視されるべきではなく、「目的」として扱われるべきだと明言した。この点で、ギーさんは私たち日本人の哲学者の資本主義批判には共感するということである。ちなみに、氏は「メッセージ」で、フランスのマルクス主義哲学者リュシアン・セーヴに注目しており、その最後はマルクスの「フォイエルバッハの最後のテー

ゼ」（これまでの哲学者は世界をさまざまに解釈してきたが、問題は世界を変革することである）で結ばれていた。

残念ながら、時間的制約もあり、また通訳のむずかしさという問題もあって、相互のあいだで必ずしも十分な議論はおこなえなかったが、以下、私の感想を述べたい。

実は私は、拙著『現代を読むための哲学』の第二章「近代的価値観から多文化共生への歩み」、第三章「相互文化哲学」とヨーロッパの自己批判」などで、多文化主義 (multiculturalism)、相互文化哲学 (intercultural philosophy) など、要するに異文化、多文化の問題を展開してきた。上記の私の応答も、かなりの程度、こうした問題意識に由来する。つまりここで、「異文化間コミュニケーション」が問題になっているということだ。実は私自身も本書で、上記の問題と関連して「第三の道」を提案してきた。それは、近代的なものと同近代・非近代との統一、西洋的なものと非西洋的なものとの統一、科学的・合理的なものとの統一、非科学的・非合理的と思われるものとの統一、などの模索であった。たとえば、その意味で、オウム真理教などの宗教という文化を、現代でどう評価すべきかという問題であった。

いずれにせよ、フランスも日本も高度に発達した資本主義国として、ギーさんも強調したように、新自由主義という段階にあって、両国は同じような困難に直面している。だから、その点で私たちが同じ問題に遭遇しているわけだから、お互

いに頑張ろうと行って、話を終わりにすることもできるわけである。だがそこでは、「第三の道」の模索の問題はおのずと消失するだろう。そこでは、私たち日本人は、西洋人にたいては西洋化した顔を見せるにとどまる。

また一応、西洋哲学の専門家として、あたかも同じ哲学上の知識の共有者として、ギーさんの哲学上の質問にかなり詳しく応答することも不可能なわけではない。もしそうすれば、ギーさんは、私たちが勤勉な日本の哲学研究者として（？）きわめて詳しく西洋哲学について理解していることに驚くかもしれない。ここでもまた、同じ西洋哲学の共有者として、相互理解することも可能である。たしかに、日本の専門の哲学学会では、そういうスタイルで国際シンポジウムなどがおこなわれる。ここでも、同様に異文化の問題は消え去る。考えれば、そのとき、私たち日本人は、西洋哲学の研究者として、頭だけ、いや頭の哲学的知識の部分だけ、西洋化しているだけではないだろうか。そして、たしかにまた、海外での経験の長い人たちがときおり感ずるように、日本人でも、西洋流の何らかの専門知識をもつインテリともなれば、自国の非インテリの人々よりも、むしろ西洋のインテリと十分に理解しあうことができるものだと考えるかもしれない。

しかし私は、以上の了解にとどまれば、実はそれは問題の表層に触れただけにすぎないと考える。それは、日本の社会や文化の深層にまで到達しないレベルでの言動である。以上の実感、単に私が日本人として長年ヘーゲルらの西洋哲学

をやってきたから生ずるのだということではないだろう。その哲学的営みを、哲学テキストを超えて、その土地の文化の土壌から考え直して初めて、提起されることができると問題がここにある。哲学とヒューマニズムと現実世界の関係の問題とは、そのなかのひとつである。

私の場合、幸か不幸か、家族が足掛け10年ほどウィーンの地で暮らすことになり、そこで私自身もいろいろと異文化体験を積まざるをえなかったという事実から、上記の問題意識が発生すると思われる。残念ながら、私の周囲では、以上の意味で、私自身と問題意識を共有する人は稀である。異文化・多文化の問題を考えつづけてきて、私とまったく同様の問題意識を共有する人も一部にはいるが、その傾向は主流にはならない。だがそれは、やむをえないことなのだろうか。

四 さらに深い異文化コミュニケーションへ

誤解されないように補足したいが、もちろん、さきほど述べた、日本とフランスの共通点は無視されえないどころか、重要な問題である。だが、それだけでは視野狭窄に陥るだろう。さらに問題は、いままでは程度明らかになってきたように、東アジアの一国に暮らす私たちと、ヨーロッパの一国で暮らすギーさんのような人とが、軽々と文化の差異を超えて相互理解することは、本当はできないということである。

だから、深く理解しあう前に、両者の間に根本的なギャップがあることを自覚するという作業が絶対に必要なのである。その点で私は、両国の間にある「哲学格差」に触れたのである。第一、フランスでは、詩人である方がこのように哲学を重視するということが現実にあるわけだが、日本ではまったく考えられない。ということは、単に西洋流のむずかしい哲学の話だから日本で理解されないのは当然だという主張に何となく還元されない問題がここにあるといえよう。ここには哲学を欠く日本の不幸な現実があるだろう。

以上の私の主張と関連して、最後にまとめとして、二つのことを述べたい。

第一に、私がレジユメで述べた「市民社会の哲学」は、いやしくも資本主義社会ならば、ヒューマニズムの問題も含めて、その基礎づけとして不可欠なものだということである。

こうした人間理解、社会理解が欠如すると、資本主義社会、とくに新自由主義といわれる現段階では、単に金儲けとエゴイズムが蔓延するだけに終わる。そこでは、いかに生きるべきかという倫理がまともに問われない。そして人権蹂躪が当たり前のようになる。すなわち、日本でそうであるように、哲学的自己反省が問われなくなる。近代市民社会を立ち上げるさいにアダム・スミスが葛藤した、「経済」(『国富論』)と「倫理」(『道徳感情論』)の関係の問題がここに見られる。ギーさんはいまフランスが新自由主義によってひどい非人間的な状態に

なっていると主張したが、たしかにフランスでも暴動などが起きることがある。若者による暴力事件が深刻だといわれた。だが、それでも、デモなども盛んであり、高校生すらが授業料問題でデモで訴えるのだ。つまり新自由主義などの勢力も盛んだが、それを押し返そうとする勢力も、幅広く根づいてるといえよう。労組なども弱くなったといわれるが、日本と比べると、そこにかかなりの差があるのではないか。

私はできたら、その辺の事情もお聞きしたかったが、果たされなかった。日本で一九九八年以来、自殺者が三万人以上のレベルを更新しつづけているという事情は、いつの間にか日本が自殺大国になったことを物語る。若者の「生きづらさ」の問題に関連すれば、日本で引きこもりや登校拒否が大量発生し、鬱病も蔓延し、しつこいいじめが集団的におこなわれ、自殺者も出ていることは周知のことである。家庭内暴力もひどく、親が子を殺し、子が親を殺す事件もいまや珍しくはない。いってみれば、社会の矛盾が外側に向かって爆発せず、内向して身近な他者や自分に(リストカット!)向かう。秋葉原事件などでは、「だれでもいいから殺したかった」といわれる。こうした「絶望的な」事件が、社会的矛盾がひどいとされるフランスでも、しばしば発生しているのだろうか。日本も欧米の先進国も、経済、教育など、いろんな分野で同じように大変な事情にあるのだと、マスコミなどは主張する。だが本当にそうなのか、このことをお聞きしたかった。

さて第二は、欧米人による仏教などの東洋思想の理解と受容の問題である。そしてこの問題は、西洋的近代化をなしたげた私たち日本人の遭遇した問題でもあるだろう。

かつて私は、ウィーン大学でその地の宗教学者が、日本では神道、仏教、儒教という三つの大きな宗教が根づいていると、とうとうと説明していたことを想起する。だが本当に、彼は日本での宗教のありようの実態を把握しているのだろうか、私は疑問に思ったことがある。反面では、周知のように、日本は実際は無宗教の国であるともいわれる。活発なのは新興宗教である。もし欧米人がワンパターンの理解でもなく、キリスト教など自文化の宗教をモデルに何となく理解するのでなくして、そうした深いレベルの宗教状況の実態を日本に即して異国の宗教として理解できれば、おそらくそこで知的ショックが生まれることだろう。そしてそこから、本当の異文化の理解が、それに引き続いて自文化の相対化と反省的理解が発生することだろう。これはヨーロッパ中心主義を脱する作業に重なるだろう。心理学者のカール・ユングがアフリカ、アメリカの先住民に触れて、痛烈な異文化ショックを起こしたことは、この典型である。以上のような状況にたどりつくことが、本当の（異文化）コミュニケーションであるとは私に考えている。

話を具体化するために、一例を挙げさせていただきたい。長年、精神科医をやってきた経験から、町沢氏は、通常日本人は、治療者に父や母の役割を期待し、そうした「転移」の

なかで家族的雰囲気醸成することを無意識的に要求してくるといふ。こうした家族的親しみがあればこそ、思い切った分析をしても、相手を傷つけることにならない。だが、西洋人の場合、治療者と患者とはまったく対等平等な個人的関係、契約的關係を結ぶのであり、そこに家族的関係が出るのは異常なことだとされる。当然、こうした「転移」は禁じられる。

こうした文化的相違の現象は、現代的な生活にあつて、深い深層的な心理のレベルに降りてこそ、露呈するものといえよう。^{*2} いうまでもなく、上記の西洋の場合こそ、近代市民社会の人間関係の産物なのである。そして付加すれば、こうした文化的差異は、そこに何か優劣があるものではなく、そこに文化相対主義という観点がまず保持されなければならない。

実は最近、映画のハシゴをやったが、『チェ・ゲバラ』というドキュメンタリー映画と『禅』という道元を主人公とした映画を続けて見たのである。それぞれ興味深かったが、この二つの映画のテーマは人間の生きかたを真撃に問うたものという点では同じであるが、その主張内容はほとんどまったく重ならないといえよう。一方は社会と政治の変革の運動のなかで戦いつづけ、最後に捕縛され殺される革命家の人生であり、他方は「あるがまま」の生活を、美しい自然との交流のなかで内面的に求める求道の生活が描かれる。要するに生きかたのパラダイムがまったく異なるのだ。だが、さきほど述べた「第三の道」の追求とは、この二つのテーマを何とかつなぎ合わせ、ともに考えることではないだろうか。そうい

う眼で事態を熟慮すれば、ここに深いレベルで、現代で必要とされる人間の生き方に見られるべき条件がほのかに見えてくるのではないだろうか。ギーさんの思いのなかにも、同様なことがあるように思われ、これこそ、現代の社会と文化に関わる根本問題なのではないかと思うのである。^{*3}

「哲学」という日本人にとってなじみのない分野の交流のために通訳して下さった今村三恵子さん、福田純子さん、まことにお疲れさまでした、本当にありがとう。そして、文化と哲学について再考させてくださる機会を提供してくれた長野さんに、あらためて感謝します。

*1 拙著『現代を読むための哲学―宗教・文化・環境・生命・教育』創風社、二〇〇四年。

*2 町沢静夫『なぜ心が病むのか』PHP文庫、二二三頁以下参照。

*3 同様な問題意識で、コミュニケーションの問題に関連して、私は最近、日本科学者会議主催の研究集会で、現代日本人のコミュニケーションや考え方の問題が、実は伝統的な日本のそれと深く結合していることに関して報告した。拙論「コミュニケーションと日本の個性の問題」、日本科学者会議編『第一七回総合学術研究集会予稿集』日本科学者会議発行、二〇〇八年所収。